

<書評>

渡辺信二著

『詩集 日本の論理 ジャパンの叙情』

(シメール出版企画、2010 年)

 関 根 全 宏

本書は、著者の第七詩集である。約 90 頁にも及ぶ自由詩で、75 のセクションに分かれているが、各セクションの長さは様々でそこには番号も小タイトル等も付されていない。

本書の際立った特徴として第一に挙げるべき点は、多声的であるということである。「悲歌になったかもしれない断片——エドガー・アラン・ポーにならって」(35)、「新年への詩」(42)、「ジャパンのための子守歌 1」(51)、「ジャパンのための子守歌 2」(53)といった詩や、「探し求めるふたり」(30)と題された合唱曲などが作中に導入されているが、いったい誰がそれらを書いているのかと、まずは立ち止まって考えずにはいられない。作品半ばにみられる「東京／シアトル」(58)と題された詩を境に、後半はアメリカ(シアトル)に関する詩行が展開されている。また、日本の戦争犯罪に関する歴代首相の態度への言及や、著者自身の生地やアイヌへの言及、さらには、医療事故に巻き込まれる親子と S 医師の話に代表されるような医療に関する話も挿入されている。「病いの歴史は文化の歴史」(15)という一行は、病いについて語る理由として読むことができるが、その挿話は作品全体に重く響き渡る死の感覚と決して無関係ではない。さらには、「まりい」(24)に関する一連の詩行は著者の第四詩集『まりいのための鎮魂歌』(1993 年)との結びつきを想起させる。

第二の特徴は、国家としての日本に対する痛烈な批判が徹底している点である。その批判的な眼差しは、ときにアイロニカルでもある。著者は、アメリカの傘下で新しい地平を目指すことない日本がこれまでの歴史において展開してきた論理のおかしさを突く。「日本にヴィジョンが無い／あるのは テレヴィジョンだけだ」(45)といったように、自由詩であると同時に、韻を踏み、全体として一定のリズムを失うことがない点も、本書の特徴である。また、アメリカとの関係における国家としての日本のあり方を問いながら、その批判は9.11やイラン・イラク戦争におけるアメリカへと及んでいる。

第三の特徴は、著者が、インターネット上のウェブ頁や新聞記事から、自分と同姓同名同字の人物をなぞる様である。ときにそれは、「2 R 2分 52秒 OK 勝ち」(15)をおさめるボクサーでもあり、また、Web ページの制作が初心者ながら旅行記を記す者でもあり、あるいは、反戦歌を Web に投稿する者でもある。さらに同姓同名同字の名前は、日本機械学会論文集にも連なり、「おしゃれ美容師」(22)やどこかの「県工芸会委員長」(24)が所有する名前でもある。自分と同じ名前の別の〈生〉をなぞる行為の動機はいったいどこにあるのだろうか。

かつて、エズラ・パウンドやT.S.エリオットといったモダニスト詩人は、詩作の一つの方法としてペルソナを用い、自己と作品との距離に意識的であった。仮面を被るという行為は、他者になりすます完全なる没個性／非個性という水準から、自分の中にある一部のヴィジョンを反映する個性の強調という水準までその効果には幅がある。同姓同名同字の人物を次々となぞり、その名前を書き記すという自己増殖的な行為は、仮面を被る行為とは全く対照的であるかもしれない。そうした詩作の方法は、極めて独特であり、詩的言語の再創造が目指されているようにも見える。この点について、著者は、「じぶんと同じ名の人が／たくさんいるので／どこに戻ればいいんだろう／誰に聞けばいいんだろう」(21)という詩行を記すだけで、多くを語ることはない。だが、この詩行を読む限り、以上の行為はどういうわけか戻るべき場所を確かめる手段であるようだ。だが、なぜ語り手は戻ろうとしているのか。そもそも語り手は誰なのか。著者なのか。「おれ」とは誰なのか。「わたし」とは何者なのか。もはやこの問い自体に意味はないのだろうか。

「現代詩は 現代にいて 現代を糾弾することが無い／だから この国を鼓舞することが無い」(25)といったように、現代詩の行方を憂い、詩のあり方に対する自問も記されている。「人はいったいどこから来て／どこへ行こうと

するのか」(15)という詩行がなげかける問いは哲学的であるが、それ以上に答えがないように見える分、詩的に響く。なぜなら、詩の言葉とは、簡単には語り言えない、掴みきれないものに向かう言葉だからだ。本書を読むとそう思われる。最後に付け加える点があるとすれば、「叙情」は「ジャパン」のものであり「日本」のものではないということである。同じように、「論理」は「ジャパン」のものではなく「日本」のものである。「日本の論理」と「ジャパンの叙情」というタイトルに見られる「日本」と「ジャパン」という呼称に対する著者の意識的な言語使用は、本詩集の主題とどのように関係しているのか。そこが最大の読みどころかもしれない。